

保育実習の意義と展開

— 学生の育ちを根底に据えて —

米 田 紀 子

奈良文化女子短期大学

Significance and Development of the Child Care Internship: For Student Growth in Mind and Skills

Noriko Yoneda

Narabunka Women's college

保育所保育指針の告示化に伴い保育の質の向上が強く求められ、従来に増して保護者支援、子育て支援に係る多様な保育サービス事業の展開が期待されている。このような変動期に求められる子育てのスペシャリスト育成を目指したとき、保育実習の意義をどう考えその展開はどのようにしたら良いのだろうか。学生の育ちを根底に据えて考えたとき、重要になってくるのは、保育実習と保育関連科目との関係性、教職員の綿密な連携の下の指導体制、実習先保育所との連携である。子どもの笑顔をつくる「美しい人」作りを目指した保育実習の在り方を考える。

キーワード：実習事前事後指導、自己肯定感、学生の育ち、実習先との連携

1. はじめに

筆者は40年間の保育所勤務から保育士養成校の教員の立場になった。長年保育現場で保育内容を研究・実践してきた実績、その中で培われた職員の連携と厚い研究体制、また退職前の6年間は行政に入り、保育指針の改定に伴う制度の改革、保育士の人事、要保護児童対策協議会の事務局などに携わった経験から、不安はあるものの保育実習担当のこの職務にかすかな自信を持っていた。保育士という職業を目指した学生に出会え、保育士育てに従事することに大きな喜びを持った。

しかし、教員になって8カ月後、その自信は見事に打ち砕かれた。保育実習Ⅰ回生（11月実施）に対する実習園からの評価が大変低かったのである。それに伴い学生のモチベーションは下がり、自信を失い、保育士になることに不安を訴える者も出てきた。一人ひとり力は持っているはずなのになぜだろう？私の責任だという自責の念でいっぱいになる。入学時の調査では、どの学生も「子どもが好き」「保育士になりたい」と、夢をもっていた。

米田 紀子 〒631-8523 奈良市中登美ヶ丘3-15-1 奈良文化女子短期大学

学生がもう一度、自己肯定感を高め、「保育士になりたい！」と意欲をもって卒業できるよう、筆者自身「保育実習指導」のあり方を一から見直そうと考えた。その検討の内容をここに報告する。

2. 保育実習 I の評価と学生自身の振り返りを見直す

保育実習 I の実習園からの評価を表1に示す。実習評価は、「不可」はなかったものの「可」が23パーセントを占める。

表1 保育所実習 I 評価 (総数65人)

評価	人数 (人)	率 (%)
秀	1	2
優	6	9
良	43	66
可	15	23
不可	0	0

実習終了直後に学生が記入した「振り返り」の結果と個人面談から、学生の困り感を総合すると、表2のようなになる。表3には、可と評価した原因と考えられる実習先保育所の所見を加えた。

表2 学生の振り返り学生 (困り感)

日誌が書けずに時間がかかった
保育士が忙しそうで、質問するタイミングが掴めなかった
質問しても答えてくれない
何を質問していいのかわからない
歌、手遊びなどもっと身に着けていたらよかった
授業で学んだ日誌の書き方と違った
言葉づかいを注意された
保育士が怖かった
喧嘩の仲裁を指示されたができなかった

表3 保育所指導者の評価

実習先保育所（注意事項）
素早く行動ができない
実習の心得が身についていない （身だしなみ、指導を受けた時の対応、言葉づかいなど）
掃除の仕方がわからない
消極的（質問がない、意欲がない）
誤字、脱字が多い
文字が乱雑
日誌等の提出が遅れる
指導したことをすぐに実行できない

保育所の所見と学生の振り返りを比べると、見えてくるものがある。基本的なマナーが身についていない、または理解していない学生たちに、指導者は丁寧に指導する。しかし、マナーは日々の積み重ねであり、すぐに直せない。初めての实習で極度に緊張している学生たちは、注意されているということはわかるのだが、どうしたら良いかわからない。その結果、すべてに対して消極的になり、「意欲がない」と見られる態度になる。典型的な例を挙げる。実習中に担当者から相談があると訪問要請を受けた学生の例である。

実習担当者からの話

- ・部分実習の指導案を指示したが書けないので、具体的に指導したが、翌日持ってきた指導案は前と同じで説明もない。「わからないところは聞いてね」と促して聞く時間を設けても黙って帰宅してしまう。
- ・保育中は立ったままでなにもできない。
- ・伝言を頼んだが正しく伝わらなかった

以上のことから、指導に困っているとのことだった。筆者はすぐに学生本人に会い、状況を聞いた。

学生の話

- ・指導案の書き方がわからない
- ・先生が急がしそうで相談できなかった
- ・何をどう動いたら良いかわからない
- ・早さについていけない

重い口を開いて話した学生の「困り感」は上記4点だった。話をしているうちに、家庭状況や生い立ち、友だちのこと、保育士へのあこがれなど、内面を話すようになり、目が輝いてきた。そこで、実習指導の先生は指導に一生懸命になって下さっていることを伝えると、学生は元気を取り戻した。次に明日か

らの実習について一緒に考え、担当の5歳児クラスの指導案を作る上でのヒントを与えて指導した。

その後、訪問指導時に実習担当者に何うと、学生は指導案を提出し部分実習も無事に行ったとのことだった。

自分の思いを伝えることを知らない、社会の中での人のかかわり方を知らない、注意を受けることを体験していないなど、学生たちに共通する克服しなければならない問題が見える。しかし、方法は考えるべきだが、少し援助することで本人が持っている力を引き出すことは可能である。

保育実習Ⅰの振り返りでは、成績の良かった学生も含め全体的に「辛かった体験」を述べ、授業開始時に全員が持っていた「憧れの保育士像」への期待が希薄になり、モチベーションが下がっていた。

3. 改めて保育実習事前事後指導を考える

学生のモチベーションを高め実習を通しての学びをより効果的なものにするためには、まず「学生を理解すること」と考え、非常勤講師から専任になり、相談と対話の時間を増やし、保育について熱く語れる環境を作った。

事前事後指導で工夫したポイントは以下の通りである。

1. 子どもの笑顔が輝き保育が楽しくなる遊び、ゲーム、絵本、指人形づくりなど学生自身が楽しみながら習得する授業内容を増やす
2. 実習日誌の書き方（読む側が読みやすい文書の書き方も含む）を実践的に指導する
3. 実習に向けて「実習課題を立てる」ことを重視し、一人ひとりが自らの課題を立てることができるよう個別指導を行う
4. 楽しい保育所、生き生きとした保育実践を映像で見る
5. 実習後の自己評価に、「自分の誇れるところ」「頑張ったところ」を導入する
6. 自己課題の明確化を丁寧に指導する
7. 学生一人ひとりが努力していることを探し、認める

実習先保育所との連携

1. 訪問機会を増やし、保育実習の意義を改めて伝え、実習生を育てる熱い思いを理解していただく
2. 実習園を7園から13園に増やして一つの園に依頼する学生を少数にし、受け入れ園の負担を減らすよう考慮する。

4. 学生が変わった！

上記の工夫の下に、昨年度末の事後指導、今年度の事前指導を経て、6月に保育実習Ⅱが実施された。僅かな時間しかなかったが、学生は変化した。実習前には、学生が発達に応じた遊びを考え相談に来たり、参加・責任実習のシミュレーションを示し意見を求めたり、絵本、造形、手遊びについて相談したりするなど、実習を楽しみにしているように思われた。結果は成績評価に現れた。(表4)

表4 保育実習Ⅱ 成績評価 (総数60人)

実習園保育所評価	人数(人)	率(%)
秀	2	3
優	23	38
良	32	53
可	3	5
不可	0	0

実習先からの評価についてはまだ多くの課題があり検討を要する。しかし、保育実習Ⅰでは23%いた「可」の評価が5%に減少した。また、実習後の学生には笑顔が見られ、振り返りにも前向きになり、自己肯定感を持つことができている様子が見られる。この点については評価できると思われる。

「実習を通して自分自身の変化」の設問に対する答えの例を以下に示す。

- ・実習での反省を次に繰り返さないようにしようと思えるようになり、今まで落ち込んでいた自分が前向きになった
- ・きびきびと動けるようになり、オンとオフが切り替えられるようになった
- ・体調管理がスムーズにできるようになった
- ・一人ひとりの子どもと向き合っかかわることができ、個々の性格を理解しようと思えるようになった
- ・2週間の実習で保育士に絶対なりたいたいと思いました。毎日子どもの違う発見ができ、こんなに楽しいやりのある仕事はないと思いました
- ・実習を経て外で子どもに出会うと、「何歳児かな?」「今どんなことができるのかな?」と無意識に考えている自分に気づいた。子どもへの興味関心が強くなった
- ・ともだちに驚かれたけど、本当に子どもが可愛くて仕方ありません。子どもに慕われて自分がかかりました
- ・「常に笑顔を忘れない」が今後の課題です。自分の無表情に気づき、表情豊かになりたいと思いました

- ・緊張も失敗もしたけど、子どもたちのことを考え、次はこうしよう、こうすればいいのかと前向きに考える事が出来た。
- ・なんで泣いているのか、なんで落ち込んでいるのか、もっと子どもの気持ちを考えようと思うようになった。そのことによってその子に応じた援助ができると思うので、見守ったり、声をかけたり一緒に考えたりするようになった
- ・こんな保育士になりたいと思える先生に出会い、保育士になりたいと思うようになった
- ・良い保育に出会い、よい環境の中で、自分のとげとげした部分がとれ、穏やかになったのではと思う
- ・保育士さんが調べたいとおっしゃってたので調べて報告した。すると、保育の中で使ってくれた
- ・子どもの安全を考慮しながら、子どもと一緒にごっこ遊びをしたり、かけっこを楽しめるようになった
- ・子どもが好きになり、子どもの気持ちを理解し、一緒に考えたりしたり共感したりすることができるようになった
- ・なんでも進んで仕事し、積極的に質問できた
- ・保育者の子どもの接し方を学び、特に食事中好き嫌いする子や食べるペースがゆっくりな子に対して、どのような言葉かけをしてもらったら食べようと思えるか、子どもの立場になって考え行動できるようになった
- ・毎日手洗いうがいをして体調管理をして、体調崩すことなく出席し実習ができた※
- ・言葉づかいに気を付けるようになった※

(※印は前述例に挙げた学生)

設問は他に「実習前に立てた課題について」「子どもの育ちから気づいたこと」「保育者から学んだこと」などあるが、学生全員に、著しい変化が見られた。もちろん学生が変わった理由が、実習指導の授業だけではないことは承知している。しかし授業の手ごたえも確かにあった。学生のその後の人生を左右してしまう、ひいては、保育士の質の向上につながる、保育実習指導の重責を感じた。

保育実習Ⅱは地元実習であり、大部分の学生が出身保育所、または近所の保育所でお世話になっている。そのため、保育所指導者に本学の教員と同じ思い、つまり学生を良く知っていて「育てたい」という思いが強くあること、また地元なので学生自身の緊張の度合いが低いことも、学生の意欲が引き出せた大きな要因になったと思われる。

5. おわりに

保育実習が、保育士の質の向上につながることは言うまでもないが、学生個々のモチベーションを高め、実習での学びをより効果的にするために、実習事前事後指導の充実が大前提となる。その展開をどのようにしていくかが、今期の研究テーマだった。前年度の反省を下に、前述のように工夫してきたが、その内容は、保育現場出身者として学生がすぐに取り入れやすい実践方法を伝えることと、学生一人ひ

とりに愛情を込めて接することに限られていた。学生の可能性を引き出すことは我々教員として大切なことだと思う。今の学生のひ弱さは想像以上であるが、学生を取り巻く社会状況が作り出したとも言える。しかし、学生が乳幼児と同じく未知なる可能性、意欲と向上心を秘めているのも確かである。学内で学んだ理論を実践・展開する保育実習、保育実習指導を通じて、その内に秘めたる未知なる可能性、意欲と向上心を引き出すことができると考える。

質の高い授業内容の研究を前提に、今後の課題として次の2点があげられる。第1に実習先での経験・学びをより有効に生かしていくために養成機関である大学と実習先保育園との指導者相互の互恵的連携、第2に学内教職間の綿密な連携の下の指導体制の確立である。前者は、保育実習担当者にとって大きな課題だが、一朝一夕には不可能であるため、まずは保育所との信頼関係づくりに努力する必要があると考えている。後者については、今全職員をあげて「実習のてびき」づくりが行われている。結果も大事だが、そのプロセスが有意義と考えれば、目標に向けた一歩は踏みだしていると思われる。

今、筆者自身の保育の歴史を振り返ってみると、いつも必要が先に立ってきた。現在多くの保育園で行われている乳児保育、障害児保育、延長保育などは、制度ができる前に必要にせまられて実行し、やりながら条件を整えるという積み重ねで行われてきた。条件の不備に負けず、保育士等職員、保護者が力を合わせて、豊かな保育内容を研究しながら克服してきた。その根底には、原点としての「子どもの最善の利益」を考慮し、子どもの側に立った保育を実現したいという強い思いがあった。これから保育者になろうとする学生にも、そんな情熱ある姿勢を期待する。

子どもの笑顔をつくる「美しい人」の育成を目指してさらに課題を克服し、学生とともに育ちあいたい。

参考文献

- 民秋 言・安藤和彦・米谷光弘・中西利恵編著 (2009). 保育所実習. 北大路書房.
- 全国保育士養成協議会 (2012). 保育士養成資料集 第55号.
- 全国保育士養成協議会「編」(2007). 保育所実習指導のミニマムスタンダード. 北大路書房.

